肥前国西部の食器

―彼杵郡・松浦郡―

中　島　恒次郎

1．はじめに

今回紹介する遺物は，佐世保市教育委員会に収蔵されている山鹿敏紀氏が収集されたものである（「山鹿コレクション」と記載する）。この遺物については，既に佐世保市教育委員会によって発刊されている『中世山城分布調査報告書』（以下「先の報告」と記載）に，収集者である山鹿氏によって記述されており，一部遺物実測図等も掲載されている（佐世保市教委1981）。既に公開収蔵されている資料群であるが，筆者が分析を行うことになったきっかけは，佐世保市史編纂室におられる中島眞澄先生より詳細な分析を依頼されたことによる。中島先生より依頼を受けた内容は，下記の諸点である。

a．古代・中世の遺物を定性分析する。

b．結果として何が導きだせるのか。

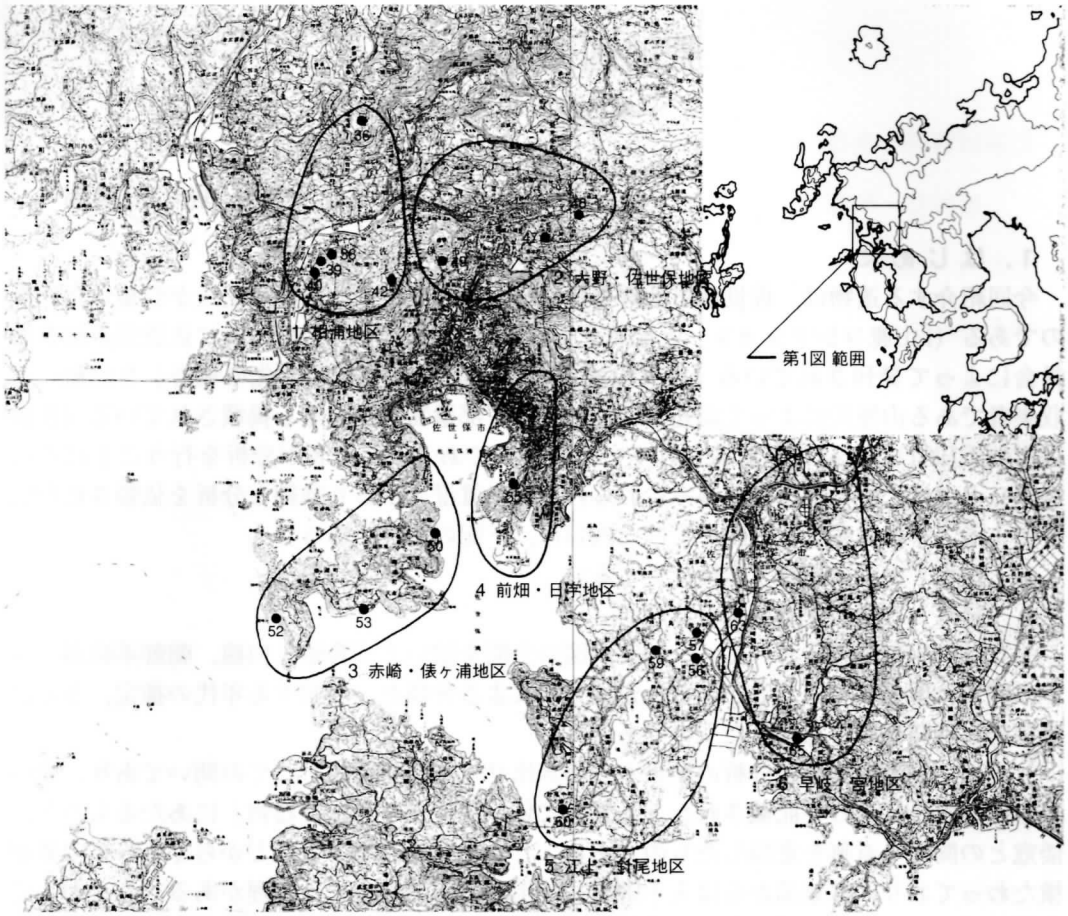
a点は，先の報告において，一部実測図の公開を除いて「青磁，白磁，朝鮮系磁器」という報告に留まっていたことから，定性分析による分類と，帰属する年代の推定，さらに空間的な時間推移を意図したものである。

b点は，先のa点の諸分析の結果から導き出せる歴史事象に対しての問いであり，先の報告に山鹿氏によって記載された「私貿易に依ってもたらされた器物」にあたるものか，倭寇との関係の有無を意図したものである。しかし採集品であることからくる分析限界が横たわっており，採集品からは入手階層，使用者階層の推定には無理がある。したがって本稿では，分類および帰属年代を検討し，そこから導きだせる事象を記述するにとどめざるを得ない。

さて資料が採集された現在の佐世保市は，九州島の西北端に位置しており，古くは肥前国に属し南を彼杵郡，北を松浦郡の二郡によって構成されている。佐世保市は，豆粒文土器を出土した泉福寺洞穴遺跡が著名で，主として旧石器，縄文時代の遺跡分布域として知られている。弥生時代以降に関しては，人骨を多量に出土した宮ノ本遺跡など，けっして人々の生活痕跡が途絶えることはなかったが，さほど注目されることなく今に至っている。本稿の対象時期である中世前期に関する考古資料も，知られていなかったわけではない。先の報告にあるように，採集資料ではあるが輸入陶磁器の報告や，西日本の瓦器生産を説く上で，佐世保市テボ神遺跡出土の瓦器椀が紹介されている（森1992）。現在の中世前期の考古学研究において，流通事象を解く手掛かりとして肥前西部が注目されつつある現在にあって（中島2000a），佐世保市の急速な大規模開発に反して，調査事例の報告が見られず，実態把握が困難な状況にあることは非常に残念なことである（註1）。

2．資料各説

さっそく資料の分析へ移ることにする。本来なら定性分析根拠として遺物実測図を掲載すべきであると考えたが，筆者の置かれた諸環境から，断念せざるを得なかった。実測図



第１図　採集地点図（Ｓ＝１/200,000）

掲載については，後考に委ねたい。

ａ．資料紹介

個別の採集地点については，先の報告で記載された地域および地点番号を踏襲し，各地点で採集された遺物すべてについて定性分析を実施した。実施した地点は19地点であり，先の報告で記載された全ての地点ではない（第１図）。なお後述する定性分析に際し，採集地点に付された番号は，混乱を避ける意味で，先の報告によって付された番号をそのまま踏襲する。

ｂ．資料解説

採集され佐世保市博物館島瀬美術センターに収蔵されている山鹿コレクションは，本稿の分析対象地である佐世保市以外の地域，例えば北松浦郡内で採集されたものも散見でき，山鹿氏の行動力ならびに調査意欲には敬服するばかりであった。

佐世保市で採集された資料についても，佐世保市北部から南部まで市域全域にわたっており，単なる「考古学ファン」がなし得る内容ではなかった。今さらながら，行政で文化財担当職員として日々の業務を漫然とこなしている筆者にとって，極めて刺激的な資料である。

採集された資料は，後述する輸入陶磁器をはじめ，東播磨系須恵器，石鍋，瓦器など多彩であったが，残念なことに時期決定に有効な土師器が，微量にしか採集されていなかったことが唯一欠点として残る。ただしこのことが山鹿コレクションの学問的質を著しく損なうことにはならない。採集された資料個々は，中世における各製品の流通範囲を考える上で，貴重な資料に位置付けられ，今後佐世保市の取り組み如何によって，肥前西部，彼杵郡・松浦郡の中世史研究の重要な素材へと昇華できるか否かを左右する端緒的資料群であることに変わりはない。

では採集された資料群はどのような資料であろうか。以下に定性分析結果を述べる。

3．資料分析

採集された資料の大半が，輸入陶磁器，中でも中国産と考えられる陶磁器が占め，残る少数資料として韓国産青磁，筑前型瓦器，東播磨系須恵器などで構成されている。

各製品の定性のための基準分類は，下記文献に依拠している。

なお実測図は掲載できなかったが，全ての資料は先述したように佐世保市島瀬美術博物館に収蔵されている。

【輸入陶磁器】

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡　XV　－陶磁器分類編－』

森田　勉　　1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究　No. 2』

上田秀夫　　1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究　No. 2』

小野正敏　　1982「14～16世紀の染付椀，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究　No. 2』

西谷　正　　1983「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究紀要第28号』

【須恵器（東播磨）】

荻野繁春　　1986「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁　第14号』

【石鍋】

森田　勉　　1983「滑石製容器」『佛教藝術　148号』

【瓦器】

森　　隆　　1993「北部九州の瓦器生産」『古文化談叢　第30集（中）』

各地点採集遺物の定性結果について，表１に記しておく。

4．成　　果

定性分析を実施してきたが，下記の点で分析限界が横たわっている。

(1)　採集資料であることから，遺物が遍在している可能性が極めて高く，後述する表１からの判読事項に関しても「見かけの結果」である可能性は否定できない。これについては，採集資料の有する資料限界であり，今後の発掘調査（発掘調査が可能な状況であればという前提がある。既に破壊されていた場合はどうしようもない）によって検証・解決すべき問題である。

(2)　量については，定量分析による量ではなく，見た目の量を記載している。

(3)　年代観については，太宰府で設定された様相に付与された年代観を適用している（註２）。

これら作業前提を踏まえて，表１から読み取れる内容を記すと下記事項のようになる。

(1) 採集資料が有する様相的な分布中心域は，Ｄ期様相である。

(2) 各地域ごとに保持様相に差が観察できる。

(3) 継続的な様相を保持している地域では，石鍋が採集されている。

(4) １．相浦地区，５．江上・針尾地区の二地区に関しては，他地区に比して全様相下の製品が採集されている。特に両地区に顕著な様相は，Ｄ期様相であり，Ｄ期様相下に一般的な製品が多量に採集されている。

表１から判読できる諸点から導き出せる諸事象は，何であろうか。ただし作業前提が，どうしても障害となり，想像の域を脱し得ない。採集された資料の有する時間幅を前提として記述すると，下記のように整理できる。

a．Ｄ期様相が顕著であった12世紀後半から13世紀初頭において，人々の活動が活発であった。特に１．相浦地区および５．江上・針尾地区の二地区において顕著である。

b．活動時間幅が長い１．相浦および５．江上・針尾の両地区に関しては，継続的かつ安定的な生活活動をうかがうことができる。特に輸入陶磁器の入手に関しては，中国のみならず韓国からの入手にも積極的であったことが想定可能である（註３）。

c．輸入陶磁器，滑石製品の多量出土が見られることから，状況としては太宰府・博多と近似している。

５．課　　題

前章において，山鹿コレクションから判読できる諸事象を記述してきた。これら諸事象が物語る歴史叙述には，残念ながら到達できなかった。したがって，中島先生から受けた宿題を未解決のまま提出せざるを得ない結果となっている。ただし下記の諸点において，未だ資料未整備な状況であり，今後の佐世保市の取り組み如何によって，解決の方向へ向うか否かの分かれ目となることは間違いない。

(1) 直接的な生活痕跡が未確認

遺構および生活臭がする土師器，雑器類の詳細が不明であることから，どのような階層の人々の使用製品であったのかが不明瞭となっている。このことは，中島先生の宿題の一つであった「倭寇」との関係がつかめないことの主要因となっている。陶磁器多量出土（採集）事象が等しく「貿易拠点」「倭寇の拠点」と結論付けることへの疑問に関しては，先に発表した論考において記述してきた（中島2001）。考古資料が物語る諸事象を，どのように客観化し歴史叙述へと昇華すべきかという問題は，簡単なようでこれまで「物語り」的な叙述，ないしは主観的な解釈に終始する記述がまかり通る不幸な時期もあった（註４）。したがって「倭寇」との関係，「貿易拠点」との関係を追求することは，山鹿コレクションの持つ解釈をどのようになすべきかという直接的な問題以上に大きな課題となる。したがって問題解決は，保留せざるを得ない。ただし，山鹿コレクションのみから「倭寇」と結び付けることへの【反証】を記述しておく必要はあろう。この【反証】は，裏を返せば解決のための課題提供という意味も含んでいる。

【反証】

・中国・韓国の貿易船から略奪したと考えられる製品の質量ともに，太宰府や博多のものとは類似ないしは劣っている。海賊行為として考えるならば，多種多量な製品が出土（採

集）していてもよいのではないかという疑問が生じる。しかしこれに対して，入手後に即取り引き（註５）によって搬出されたとする反論も用意できる。だがこの反論および【反証】としてあげた内容ともに，想像の域を脱し得ていないことを知る必要がある。お互いに検証し合う必要がある。

(2) 他の地域におけるＤ期様相の共通点

本稿の分析対象地域の顕著な様相は，12世紀後半から13世紀初頭のＤ期様相であることは述べてきたとおりである。この様相が顕著であることは，本稿の分析対象地域のみならず，先に分析を行った小値賀島出土資料にも共通であった（中島，塚原1999）。輸入陶磁器の多量流入は，前様相であるＣ期から顕在化してくるが，本稿の分析対象地および小値賀で共通に見られるＤ期様相の顕著な資料出土（採集）が物語るものは何かが，今後に課せられた課題となる。

6．おわりに

本文に記してきたように，中島眞澄先生により課せられた課題の内，歴史叙述に結びつく「倭寇」との関わりに関する結論を得ることはできなかった。記してお詫び申し上げる次第である。なお中島眞澄先生には，資料調査に際して御尽力，御教示を賜るとともに，今回の報文作成に対して御快諾いただいた，記して心よりお礼申し上げます。また，寄稿に対して御快諾いただいた古門雅高氏にも合わせてお礼申し上げます。さらに下記の方々より御教示，御援助を賜った，記して心よりお礼申し上げます。

前川雅夫（佐世保市史編纂室），市来慎一（佐世保市博物館島瀬美術センター）

【註】

註１　単に筆者が知らないということかもしれない。しかし情報の伝達が広くなされていれば，多少なりとも伝わってくるはずであるが，それがないということは，無に等しいこととも考えられる。

註２　九州全域の食器組成について，全てを検討および実見したわけではないが，九州島内の旧国単位で出土している食器群の様相を見ると大きな様相差を見出せる状況にはなかった。強いて述べると各地域の有する食器相個々に付与された年代観に意見の相違が存在しているのみである。この課題に内在している問題について，別稿にて詳述しているため，こちらを御参照いただきたい（中島2000ｂ）。

註３　等しく韓国からの直接輸入を説いているのではない。中国製品に関しても同様である。

註４　顕著な事例としては，前期旧石器研究において噴出した，捏造問題を典型例としてあげることができる。

註５　商人層が介在する「商取り引き」であったかどうかは，判然としない。

註６　先の報文（中島・塚原，1999）において，Ｄ期様相の年代的位置付けを誤認していた，本稿において訂正を行う。

【引用文献】

佐世保市教育委員会1981『中世山城分布調査報告書』

森　　隆・焼成など1992「北部九州周辺の瓦器生産－熊本県と長崎県における若干の知見より－」『中世土器研究　第64号』

中島恒次郎・塚原博1999「肥前西部（小値賀島）の食器」『中近世土器の基礎研究　XIV』

中島恒次郎　2000ａ「初期貿易陶磁器研究の成果と課題－九州における歩みと今後の展望－」『貿易陶磁研究　Ｎｏ.20』

中島恒次郎　2000 b「大宰府出土の実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究　XV』
中島恒次郎　2001「遺物搬入背景立案のための一分析」『博多研究会会誌　第９号』

表１．採集遺物様相

地区	番号	遺跡名	様相【時期】	C期【11世紀末から12世紀中頃】					D期【12世紀後半～13世紀初頭】											E期【13世紀中頃～13世紀後半】			F期【13世紀中頃～14世紀初頭】			G期以降【14世紀前半以降16世				
			焼物種別	白磁【中国】				青磁【韓国】	白磁【中国】			青磁【中国】								須恵器【東播磨】		青磁【中国】	須恵器【東播磨】	陶器【中国】	白磁【中国】		青磁【中国】	白磁【中国】		青磁【中国】		
			器種	椀			華南系	椀	椀			椀				Ⅲ			鉢			椀	鉢	盤	椀	Ⅲ	椀			椀		
			分類	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ		Ⅲ	Ⅴ-4	Ⅶ	Ⅷ	龍Ⅰ	同Ⅰ	同Ⅱ	同Ⅲ	龍Ⅰ	同Ⅰ	破片	Ⅳ	Ⅴ	龍Ⅱ-b	Ⅵ	Ⅱ	Ⅸ	Ⅸ	龍Ⅲ	D群	E群	龍Ⅳ	C-Ⅱ	B-Ⅳ
1.相浦	36	牟田張			●				●	●	●	●	●			●				●											
1.相浦	38	中里		●				▲				●		●							●				●	●				●	●
1.相浦	39	竹辺(武辺城跡)														●					●										
1.相浦	40	殿平		●						●		●	●		●	●					●				●	●			●椀		
1.相浦	42	高筈							●			●		●	●				●		●				●		●小坏		●盤		
2.大野・佐世保	46	矢峰（城ノ下）																											●盤		
2.大野・佐世保	4	角仏		●					●	▲		●	●			●	●					●									
2.大野・佐世保	49	横尾																											●椀		
3.赤崎・俵ヶ浦	50	椎ノ木										●																			
3.赤崎・俵ヶ浦	52	兜崎		●																											
3.赤崎・俵ヶ浦	53	崎野崎		●	●								●																		
4.前畑・日宇	55	前畑										●																			
5.江上・針尾	56	貴船神社		●		●			◎		●		●		●	●	●														
5.江上・針尾	56	貴船神社北							●						●																
5.江上・針尾	57	大刀洗（江上支所裏）		●	●				●	●	●	●	●			●	●			●	●		●	●	●	●				●	●
5.江上・針尾	59	塩釜																●													
5.江上・針尾	60	針尾小鯛			●				●			●			●					●	●								●椀		
6.早岐・宮	63	三日月		●			●		●																						
6.早岐・宮	65	天神屋敷							●																						

【凡例】：顕著な様相

●：ある，◎：ある（量多い），▲：分類不明瞭

D期【12世紀後半～13世紀初頭】													E期【13世紀中頃～13世紀後半】			F期【13世紀中頃～14世紀初頭】			G期以降【14世紀前半以降16世紀初頭】							その他の製品					
白磁【中国】			青磁【中国】							須恵器【東播磨】		青磁【中国】	須恵器【東播磨】	陶器【中国】	白磁【中国】		青磁【中国】	白磁【中国】		青磁【中国】			青磁【韓国】	染付	石鍋				青白磁【中国】	瓦器【筑前型】
椀			椀				皿			鉢		椀	鉢	盤	椀	皿	椀			椀			象嵌	皿						
V-4	Ⅶ	Ⅷ	龍Ⅰ	同Ⅰ	同Ⅱ	同Ⅲ	龍Ⅰ	同Ⅰ	破片	Ⅳ	Ⅴ	龍Ⅱ-b	Ⅵ	Ⅱ	Ⅸ	Ⅸ	龍Ⅲ	D群	E群	龍Ⅳ	C-Ⅱ	B-Ⅳ		B1群	A群	B群	C群	破片		
●	●	●	●	●			●				●																	●		
			●		●							●				●	●				●	●	●香炉Ⅲ	●				●再加工品		
							●					●														●				
	●		●	●		●	●					●				●	●			●椀			▲Ⅲ×Ⅳ					●再加工品		
●			●		●	●				●		●				●		●小坏		●盤							●	◎		
																				●盤										
●	▲		●	●			●	●					●																	
																				●椀										
			●																											
				●																										
			●																											
◎		●		●		●	●	●																		●				
●						●																								●
●	●	●	●	●			●	●			●	●		●	●	●	●				●	●		●				●	●合子蓋・椀	
									●																			●		
●			●			●					●	●								●椀										
●																												●		
●																												●再加工品		